えられなくなると、山かごに乗ってまでもおうしんに出かけました。

千代子は、リー婦人に、「ケサ先生は、休ようしなければ命がありません。」とうったえました。リー婦人は、心配しさっそく、かわりの医者をさがしました。

ケサは、安心して休ようすることができました。そのため、ケサの病気は良くなりつつありました。

そんなとき、夢にみていたスズラン村の土地が、かりられることになったのです。さっそく、病院を建て、スズラン病院のかんばんをかけました。ケサたちは、滝尻原に出かけたことを思い出していました。

それから、三週間たった日の午前、昼前まで元気だったケサが、とつぜん心ぞう発作をおこしたのです。そして、スズラン病院ができたのもつかの間、うそのように神さまのもとに行ってしまいました。

大正十三年十一月、四十才でした。草津での七年間、

「人、その友のために生命をすつる。これより大きな愛はなし。」